

本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注（五）

伊藤伸江・奥田 勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、翻刻と注釈を試みることにした。なお、今回の訳注で扱った句はすべて秋の発句である。

【凡例】

一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本（文明本）、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本（明応本）の二本である。しかし、現在両本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集 論集』（吉昌社・昭和二一）の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」とする。

一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者が（ ）書きで「ママ」と注した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補った。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が妥当と考えられる語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。翻字本文との相違箇所については、翻字を適宜参照されたい。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、【校異】、【他出文献】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】【補説】等の項目も設けた。

一、【他出文献】にあげた心敬の作品集とその略称は以下の通りである。

心玉集（野坂氏本）↓心玉集（野） 心玉集（静嘉堂文庫本）↓心玉集（静）

心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）↓心玉集拾遺（静）

芝草内連歌合（天理本）↓芝草内連歌合（天）

芝草内連歌合（松平文庫本）↓芝草内連歌合（松）

於関東発句付句（吉田文庫本）

心敬僧都百句（岩瀬文庫本）

また、芝草句内発句のうち、吾妻下向発句草におさめられた句は（吾妻下向発句草）と記した。その他の他出文献に関しては、以下の通り扱う。

宗硯等日発句（大東急記念文庫本）は、宗硯等日発句、年中日発句（金子本）は、専順等日発句（金子本）、玉連集は専順等日発句（伊地知本）の名称及び句番号を『連歌大鑑』により用いる。

一、【語釈】【考察】【補説】にあげた和歌、連歌、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名

など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名、漢字等に改めた。

【翻刻】

さくら色にうつろふ春の青葉かな

此春といへるはかり也秋といひては無下のこと

なるへし

【校異】

さくら色に―桜色に(明) 青葉かな―青葉哉(明) はかり也―計也(文)、字計也(明) いひては―いひて(文)
のことなるへし―に異なるへし(文)、の事也(明)

【本文】

55、桜色にうつろふ春の青葉かな

この春といへるばかりなり。秋といひては無下のことなるべし。

【語釈】○桜色：桜の花のように、ほんのりと赤い色。桜の花の色。心敬は、この言葉を春の句によく使う。「桜色」は定家が春風に用いた言葉であるが、その色目を遠目に空や山全体に投影した、とらえどころのないかたまりの表現として心敬は受け継いでいる。「桜色の庭の春風跡もなし訪はばぞ人の雪とだに見む」(新古今集・春下・134・藤原定家)。「さくら色に空さへとづる梢かな／花にもり来るうぐひすの声」(菟玖波集・春上・38・無生法師)。「桜色に世はうち霞む句かな」(竹林抄・発句・1613・心敬)。「桜いろに世はうちくもる朝哉」(心玉集・春・669)。「さくら色にくもるばかりのあした哉」(芝草句内発句・41)。「うつろふ…：こはほんのり赤く青葉の色が変わっていくことをいう。「桜色」に下葉を染めよ秋の露」(芝草句内発句・秋・301)。「桜色」を使うことで、春の花盛りの頃の光景を幻想として重ね合わせ

る意識があるか。○青葉：桜の花が散った後、晩春に芽吹く若い葉。「花に見ぬ夕暮深き青葉哉」（竹林抄・発句・1645・題知らず・心敬）。「うらむるむくひなどなかるらん／花にうき青葉の春に散もせで」（吾妻辺云捨・84）。○この春：過ぎ去った今年の春。

【他出文献】竹林抄1728、心玉集（静）827、心玉集（野）257、芝草句内発句303、大発句帳4901

【補説】春の情景を思わせる語句を使い、秋の情景を詠む、一見語句の選択を誤ったかのような印象を与える句であるが、自注で、「春」は過ぎ去った今年の春を考えていることを示す。この一年の春から秋への時の移り変わりを意識させ、還らない春の盛りの美しさを重ねつつ紅葉していく様を見つめることを示唆し、説明している。

自注において心敬は「この春といへるばかり也」と多くを語らない。同様の言い方をしてるものに第65句の自注があり、こちらも春秋を反転させた言い回しである。心敬の発句の創造の根幹に関わる部分であるので、自身の美意識の理解を心中強く求める気持ちがあり、特に本句では強く短い言い方をしてるのではないか。

『竹間』は、この句に関して「桜ノ木ナリ、紅葉スルモ桜色ナル也、秋ノ若葉ニテハ無曲」と注している。「春」「秋」の時期の理解に伴い句の理解が変わってくることを指摘した『芝草句内岩橋』の心敬自注の言葉を受け継ぎ、兼載なりの理解を示す。

【現代語訳】

桜色に染まったあの春の花の盛りから、時がたち青葉となった木々も、今また秋が来てほの赤くうつろっていくことだ。
この春の青葉が桜色に、と言っているだけのことである。これを秋といつてはこの上なく悪い表現になるのである。

【翻刻】

なかめこし月のうらみん今夜かな

十五夜に侍れば春夏その外の秋の月はもの
 ならずとおもへるを今夜のほかの月やうらみ侍らん
 と也

【校異】

ななめこし―詠こし(明) うらみん―恨む(明) 今夜かな―こよひかな(文) 十五夜に侍れば―十五夜の晴天にく
 らへ侍れば(明) その外の秋の月は―其外の秋の月(文)、その外の秋の月(明) ものならずとおもへるを―物なら
 ずに思へるを(文)、物ならず思へるを(明) 今夜のほかの月や―今宵の外の月や(文)、今夜の外の(明) うらみ侍
 らんと也―うらみんと也(文)、うらみや侍ると也(明)

【本文】

56、ながめこし月のうらみん今夜(こよひ)かな

十五夜に侍れば、春、夏、その外の秋の月は、もの

ならずとおもへるを、今夜のほかの月やうらみ侍らん

となり。

【語釈】○ながめこし月：これまでずっと眺めてきた月。自注に、春の月、夏の月、十五夜であるこの句当日の月以外の月が例として述べられている。○うらみん：(月が)恨みに思う。月の美しさをめでる気持ち_が不十分な際に、月が不満を感じる。「出るより入まで月をみすてねば月のうらみん時のまもなし」(草根集・終夜見月・9065・康正元年九月廿六日詠)。「人ゆへ更くる月や恨みむ／さ男鹿の妻待山に旅寝して」(竹林抄・秋・376・心敬)。○今夜かな：今日の夜の月であることだよ。十五夜の月は、夕方から上り、真夜中近くに南中し、明け方にしずむ。○ものならず：もの数ではない。

【他出文献】宗硯日発句 230（第二句「月は恨む」）、専順等日発句（金子本） 229、心玉集（野） 248、芝草句内発句 283
 【現代語訳】

私がこれまで眺めてきた数々の月も、今宵の十五夜の月と比べれば美しいとは思われない。それを数々の月が恨みに思うほどの、素晴らしい今宵の月であることよ。

十五夜でございますので（その月の美しさに）、春や夏、十五夜以外の秋の月は、みな物の数でもない私が思っているのを、今夜以外の月は恨んでいますでしょうということである。

【翻刻】

一とせの月をくもらすこよひかな

これも名月の夜のすくれてあきらかなるに
 くらへ侍れはひかりけたれぬることを

【校異】

一とせの——一年の（明） くもらすこよひかな——曇す今夜哉（明） これも名月の夜の——是も明月の夜の（文）、ナシ（明）
 すくれてあきらかなるに——ナシ（明）、くらへ侍れは——前句の心におなじく今夜にくらへ侍れは（明） ひかりけたれぬる——一年の月はひかりうすき（明）、ことを——事をそ（文）、事を（明）

【本文】

57、一年の月をくもらすこよひかな

これも、名月の夜のすくれてあきらかなるに
 くらべ侍れば、光消たれぬることを。

【語釈】○一年…この一年。月に關しては、通常、一年間で最も美しい月として八月十五夜の月を詠む際に「一年の月」と使われる。「ひととせの秋のなかばはのこれども月は今夜ぞかぎりなりける」（公任集・八月十五夜・116）。「ひととせの月」はも中の秋の空こよひによりてそふ光かな」（柏玉集・八月十五夜・847）。「ひととせのかけや今夜によるの月」（宇良葉・秋・286・おなじ心（稿者注名月）を）。○一年の月…この一年の月。ただ、心敬はここでは、名月の今夜の月を除く、他の日の月をさす形で使っている。○名月の夜のすぐれてあきらかなる…八月十五夜の月は、とりわけ明るく輝いていること。○消たれぬる…消されてしまう。「ゆふながめいつより萩につたふ風心ことばを吹きけたれぬる」（拾玉集・3955・献南海漁夫秋十首）。

【他出文献】心玉集（静）815、心玉集（野）247、芝草句内発句282、芝草内連歌合64
※日文研連歌DBは「おくらす」とするが誤り

【現代語訳】

この一年の月をみんな曇らせてしまうような、そんな美しい今夜の月であることよ。

これも（直前の句とおなじく）名月の夜がたいへん明るく美しいのに比べますと、他の夜の月の光が消されてしまつたことを（詠みました）。

~~~~~

【翻刻】

秋の野の花のきぬうつあらし哉

人はせぬわさなり秋の野かせのあらしは

さなから草の花色衣をうつかと見え侍ると也

【校異】

きぬうつあらし哉―衣うつあらしかな（文）、衣うつ嵐かな（明） わさなり―わさ也（文、明） 秋の野かせのあらし

は―秋の、の風のあらかきは(文)、花染の野をあらかき風のしほり侍は(明) 草の花色―秋の色の(明) かと見え侍ると也―かとみえ侍はと也(文)、ことく也(明)

【本文】

58、秋の野の花のきぬうつ嵐かな

人はせぬわざなり。秋の野風の荒きは、

さながら、草の花色衣を打つかと見え侍るとなり。

【語釈】○花のきぬ：ここは草の花が一面に咲いている様子を、「花のきぬ(衣)」と表現している。和歌では、桜の花が満開に咲きつらなっている様を、「花のころも(衣)」と表現するのが一般的である。「春かぜにかすみのそでもにほふなりはなの衣をしたにかさねて」(政範集・霞中花・424)。「花のきぬ」の形は非常にまれであるが、正広が、桜の花が一面に咲いている様を「さほ姫の霞の衣花のきぬしろきを後に重ねてぞ立つ」(松下集・霞中花・1090)と詠み、さらに心敬は「にほへ猶花のきぬぎぬ跡もなきあさぢが庭に残る春風」(心敬集・花形見・431)と、花のなごりの様を思い「きぬ」と「きぬぎぬ」を併せて詠んでいる。後には後柏原院が「花のきぬぎぬ」を使い詠んでいるが、他の例は管見に入らない。「花のきぬ」は連歌でも心敬の用例しか見えず、きわめて珍しい。「山姫も花のきぬぬぐ卯月哉」(心玉集(静)・夏・728)。さらにここでは、秋の花に「花のきぬ」を用いており、自由な用法がきわだつ。秋草では露草の色を「花の色」と表現することがある。「やみなる夜、星の光ことにあざやかにて、はれたる空は花の色なるが、こよひ見そめたる心ちしていとおもしろくおぼえはべれば」(玉葉集・2159 詞書・建礼門院右京大夫)。「花の色々」という語句と同様に、「花の衣々」と複数化したものであろう。

○きぬうつ：柔らかくするために布を打つ様と、嵐が花を吹きひどくゆらす様を併せ表現した。正徹に、花色衣を打つ様とあわせ、野辺の草花の色がうつろうさまと野辺の霜に映ずる月とを掛けた次のような歌があり、心敬の発想のヒン



トになったか。「初霜の花色衣今夜たれうつろふの月にうつらん」(草根集・月前擣衣・3773)。○花色衣：咲く花を衣に見立てた語。「山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして」(古今集・題しらず・1012・素性法師)。「月草の花色衣いかにせむをざさをわくる秋のしら露」(堀河百首・露・722・大江匡房)。「七夕の手にもをとらず野べの虫花色衣たれにをらん」(心敬僧都十牀和歌・幽玄体・野虫・100)。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草) 580

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明二年秋の句である。

【現代語訳】

秋の野の一面の草花をまるで衣をうったかのようになびかせ乱していく嵐であることよ。

他人は詠まない技法である。秋の野風が荒い様子は、さながら、草花の衣を打っているかのように見えますということだ。

【翻刻】

見ぬ山の松そめいたすしくれ哉

此みぬ山はむかひていかにもみたる山なり春

夏などは見ざりし松を時雨のこと木を染

ぬるゆへに青くあらはしいてたる心也

【校異】

そめいたすしくれ哉―そめいたす標イしくれかな(文)、染出す時雨哉(明) みぬ山は―見ぬは(文)、見ぬ山とは(明) むかひていかにもみたる山なり―いかにむかひて見たる山也(文)、むかひていかにも見たる山也(明)、染ぬるゆへ―染ぬる故に(文)、染ぬるかゆへに(明) 青くあらはしいてたる心也―青くあらはれたるこゝろ也(文)、あをく

顯し出したる也（明）

【本文】

59、見ぬ山の松染めいだす時雨かな

この見ぬ山はむかひていかにも見たる山なり。春、

夏などは見ざりし松を、時雨のこと木を染め

ぬるゆゑに青くあらはしいでたる心なり。

【語釈】

○見ぬ山：（意識して）見ていない山。心敬には他に、心に想像する山を表現した句「一声に見ぬ山深しほととぎす」（芝草句内岩橋上33）があり、心象風景や、意識に上らない情景など、ありきたりでない情景を描こうとしている。○松染めいだす：木々を紅葉させることで、松を染めだしたかのように、目立たせる。松そのものは常緑だが、時雨が周囲の木を紅葉させ、結果的に松を浮かびあがらせることを表現している。「我がこひは松を時雨のそめかねてまくずが原にかぜさわぐなり」（新古今集・恋一・1030・慈円）。○時雨：秋冬に降る雨。紅葉を紅葉させ、散らすものとされる。

【他出文献】

心玉集（静）854、心玉集（野）284、芝草句内発句297、芝草内連歌合（天）2605、芝草内連歌合（松）70、専順等日発句（伊地知本）258、心敬僧都百句（岩瀬文庫本）2186

【現代語訳】

これまで意識して見ていなかった山の木々を時雨が染めて、常盤木の松の緑を浮き立たせる、そんな時雨であることよ。

この「見ぬ山」は、見たことのない山ではなく、眼前に向きあって、普段よく見ている山である。春、夏などは、目をとめて見ることもなかった松なのだが、時雨が、他の木を紅葉させたために、松を（紅葉した木々の中に）青く現し出したという意図である。

## 【翻刻】

時雨けりことの葉うかふ秋の海

石山にての発句なればひかるけんしの卷々の  
湖水にうかひたるなといへる事によせ侍り

## 【校異】

ことの葉―言の葉（明）　ひかるけんしの卷々の―光源氏の卷（文、明）　湖水―この湖水（文、明）　いへる事によせ侍り―いへる事によせ侍り（文）、の事を思ひよせ侍り（明）

※二行目、『心敬集論集』の翻刻は「卷々」の「々」を欠いているが誤り。

## 【本文】

60、時雨けり言の葉浮かぶ秋の海

石山にての発句なれば、光源氏の卷の

湖水に浮かびたるなといへる事によせ侍り。

【語釈】○時雨けり：しぐれていることよ。宗硯が多く用いた表現であり、心敬周辺の連歌師たちも用いている。「時雨けり露もしげ木の中の秋」（宗硯発句并付句抜書・秋・1878）。「雨木の葉ふりみふらずみ時雨けり」（竹林抄・発句・1787・専順）。「時雨けり木の葉をおくの滝の声」（自然齋発句・冬・1386）。○ことの葉うかぶ：言葉が浮かんでいる。後述

【考察】に引く源氏物語に関する伝承より来た表現。○秋の海：秋の季節の海。一般的には様々な場所を詠むが、ここは自注から琵琶湖をさす。「月にみつ夕塩寒し秋の海」（文明十二年九月八日何人百韻・発句・宗祇〔筑紫にくだり侍し時、豊浦の宮にて、同じ心を〕（老葉（毛利本））。○石山にての：石山寺での連歌張行においての。石山寺は、滋賀

県大津市にある東寺真言宗寺院。観音信仰で名高い。○光源氏の巻：「光源氏」は源氏物語の俗称。源氏物語の巻々の意。○湖水に浮かびたる：源氏物語の内容が湖面に浮かぶこと。「秋ふかし言葉の林筆の海 五十四帖の面影湖水に浮かびたるなど言ひ伝ふることを思ひよれるばかりなり。」（宗牧『東国紀行』）。↓【考察】

【考察】紫式部の源氏物語執筆説話は、式部が、石山寺で湖面に映る八月十五夜の月を見て思いついたとする形が主に流布するが、心敬の句は、源氏物語の内容が湖面に浮かぶことを詠んでおり、この形の言説は『源氏大鏡』第二類本に見られるものである。

『袖か、み』

式部此物語をつくらんとてこと成就の祈誓のために石山にまいりつやしけるに八月十五夜の月湖水にうつりて水の  
おもてあきらけく心もくまなくすみわたりたるにつくるへきさうしのおもむきみつうみの波にうかひあらはれたる  
なり

『光源氏一部詞』の以下のような序文注記「おりから十五夜の月水うみのおもてにうかびてあきらかなるをみるに式部が心もすみやかになりて水のおもてにげんじの事うかびたるといふは、いつはり也、式部が心にうかみたる也」から、享徳二年（一四五四）頃には、琵琶湖の水面に源氏物語の内容が浮かんだとする説が伝播していたことがわかる。心敬はこの説を知りそれによったのである。また、『源氏一部抜書』では、

くしきぶいし山のかんおんにまいりて一七かこの事をきせひ申けるそのしるしに湖水のなみのうへに六十のまきならひのしたひのこゝろこと葉のうかひたりけるをみたまひてかき待るとかや

との記述がある。『源氏一部抜書』は、連歌作成用に、源氏物語の巻々の和歌と本文を抜き書き、寄合も記した書であり、中野幸一氏は、『源氏一部抜書』は、兼載の源氏研究書として松井簡治氏が言及したが所在不明となっていた『源氏物語抄』と考えてよいものではないかとされている。

さらに心敬は『芝草句内岩橋下』においても、同じ逸話をもとに歌を詠み、自注で説明している。

湖上眺望

くちせじなうつす硯の石山やうかびし海の遠き言の葉

彼六十帖の、湖水の月にうかびし事を

「湖上眺望」題（または「湖眺望」（『心敬十牀和歌』）で、心敬のような石山とからめての詠は管見に入らない。和歌にまで源氏梗概書に付された逸話を詠む心敬独特の手法は、注目に値する。↓伊藤伸江「心敬発句考」『芝草句内岩橋上』の『源氏物語』関係句―（『文学・語学』第二二二号・平成二九・四）

また金子元臣氏蔵『源概集』に心敬の跋があることが、稲賀敬二氏に指摘されている（稲賀敬二『源氏物語の研究成立と伝流補訂版』（昭和58・笠間書院）。心敬は、梗概書類を保持し、様々な源氏物語関連の言説を使用して発句にしたてたことがわかる。

【他出文献】心玉集（静）843、心玉集（野）269、芝草句内発句308

【現代語訳】

時雨ていることよ。秋のこの琵琶湖の水面には、かつて紫式部の面前に言の葉が浮かんだように、木の葉が散り浮かんでいる。

石山で詠んだ発句ですので、源氏物語の卷々が、湖水に浮かんだなどといったことよせて詠みました。

【翻刻】

あさ露そ木葉になさぬさ夜時雨

夜のほとはさなから雨木葉わかさりしに

おきいて、朝露を見て時雨なりけりと見侍る

はかり也

## 【校異】

あさ露ぞ—あさ露の(文)、朝露ぞ(明) さ夜時雨—小夜時雨(明) ほとは—程は(文) わかさりしに—聞分さりしに(明) おきいて、—おき出て(文)、起りて(明) 朝露を見て—露を見て(明) 時雨—しくれ(文) 見待るはかり也—見待計也(文)、しれるを(明)

## 【本文】

## 61、朝露ぞ木の葉になさぬ小夜時雨

夜のほどは、さながら、雨・木の葉分かざりしに、

起き出でて朝露を見て、時雨なりけりと見待るばかりなり。

【語釈】○朝露…ここでは夜時雨が降った後に残る水滴を朝露と見る。「いろいろのあきのはやしにとりのみて／よるのしぐれのしるきあさつゆ」(難波田千句第二百韻・51／52)。○木の葉になさぬ…木の葉が散る音だと聞きなさない。夜の間聞こえていた音を、木の葉の落ちる音が雨音かと迷っていたが、朝、露を見て、木の葉の音ではなかったとわかった、ということ。木の葉の散る音と時雨が降る音が聞き分けられない様子は、多く和歌に詠まれる。「まばらなるまきのいたやにおとはしてもらぬ時雨やこのはなるらん」(千載集・冬・崇徳院に百首歌たてまつりけるとき、落葉のうたとてよめる・藤原俊成・404)。「木葉ちるとばかりききてやみなましもらで時雨の山めぐりせば」(千載集・冬・時雨のうたとてよみ侍りける・仁和寺後入道法親王覚性・405)。○小夜時雨…夜の間に降る時雨。この発句は、芝草句内発句に入ることから、東国下向以前の句と考えられるが、和歌にも、また例句のように東国下向後の付合にも詠んでいる、心敬好みの語。「ききわぶるね覚の床のさ夜時雨ふる程よりもぬるる袖かな」(新統古今集・冬・616・前大僧正滿意)。「さ夜時雨うきたる夢は跡もなき枕の月に残る雲かな」(心敬集・暁時雨・375)。「すぐるもさびし松の下陰／あまもきけ磯のね覚のさ夜時雨」(吾妻辺云捨・531／532、竹林抄・雑連歌上110にも入る)。○さながら…まるつきり。

【他出文献】竹林抄171、心玉集（静）838、芝草句内発句310、大発句帳580、心玉集（野）268（「朝露は木葉にならぬ小夜時雨」）

【補説】『竹林抄之注』は「夜もすがら時雨る、を、木の葉の音とき、しか、今朝露を見て、時雨にて有けるよと思し也」、「竹聞」は「夜ハ木葉ト思ひしヲ、露ニテ實ノ時雨ト知也」と記す。

この自注も55句同様「くばかり也」と短く記す。後に『竹林抄』に入る句でもあり、速やかな理解を兼載側に求める、発句の作意への自負が感じられるか。

### 【現代語訳】

朝露が置いていることだ。この朝露を見て、夜の間、木の葉の散り落ちる音なのか、時雨の雨音なのか、わからなかったあの音は、木の葉の落ちる音ではないとわかった。夜の間の時雨の音であったのだ。

夜のうちは、まったく、雨音とも木の葉の散り落ちる音ともわからなかったが、朝になって起き出して朝露が降りているのを見て、時雨であったのだと見ている、ただそれだけの句でございます。

### 【翻刻】

川水のもみちは山のしくれかな

遠水になかれていまする落葉を見て深山の

時雨けるほとをしれる風躰也 かの

たつた河紅葉、なかるの名哥をうらやみ侍り

### 【校異】

川水―河水（文、明） もみち―紅葉（明） 山―やま（文） しくれ―時雨（文、明） 遠水になかれていまする―遠く水になかれましたる（文）、遠水になかれましたる（明） ほとを―程を（文） かのたつた河紅葉、なかるの名哥―龍田河柀

葉なかる名哥（文）、もみち葉なかる神なひの名哥（明） うらやみ侍り—うらやみ侍る也（文）

【本文】

62、川水の紅葉は山の時雨かな

遠水に流れいでたる落葉を見て、深山の時雨けるほどをしれる風体なり。かの、

竜田川紅葉流るの名歌をうらやみ侍り。

【語釈】○川水：川を流れている水。「明わたりたる川水の色／鵜飼舟かがりほどなくくだる夜に」（竹林抄・雑蓮歌上・専順・1090）。○川水の紅葉：川の水に散り浮いた紅葉。ここは、自注から、深山で紅葉し、川上で散り落ちて、川下に遠く流れきた紅葉である。「大井河水の流れもみえぬまでちる紅葉ばのうかぶけふかな」（新拾遺集・冬・「寛治五年十月白川院大井川に御幸せさせ給うて、落葉満水といふことをよませ給うけるにつかうまつりける」・権中納言俊忠・588）。○時雨：秋冬に降る雨。木の葉を紅葉させ、散らすものとされる↓59語釈。「竜田川しぐれもここにながるめりちる紅葉葉のふかきみかさ」に（柏玉集・時雨・1040）。○時雨かな：心敬には、時雨にことよせて世の様やみずからの人生をふりかえる句が多い。「めぐる間を思へば去年の時雨哉」（竹林抄・「東へ下り侍りし次の年、初冬の比、時雨を」・1779・心敬）、「雲は猶定ある世の時雨かな」（竹林抄・1782・心敬）。○遠水：遠くにある水。自注に「遠水」という漢語を用いる心敬の感覚には注意が必要であろう。なお、文明二年五月に宗祇に与えた『所々返答』第三状でも、深く句を思案する際のたとえとしてこの語を使用している。「ただ、いかばかりも心をしづめて姿言葉に思ひをかけ、わが句のことはりをはなれて、よそにのき侍て遠水をながめ、秋の露を見侍らんごとくの工夫、大切なるべく哉」（所々返答第三状）。○竜田川紅葉流る：古今集284番歌「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（詠み人しらず歌）をさす。竜田川に紅葉が流れているのは、上流にある三室山に時雨が降って木の葉が散っているからだろうという推定の歌。



【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草） 579

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明二年秋の句となる。

【現代語訳】

川水を紅葉が流れているのは、山に時雨が降ったということなのだなあ。

遠くの水まで流れ出てきた落葉を見て、深山が時雨ているその様子を知ったという風体である。あの、「竜田川もみち葉流る」の名歌をうらやみまして（詠んでいます）。

【翻刻】

くもる夜は月に見ゆへきこゝろ哉

月をあはれふ人のなさけの浅深をはくもる

夜そ空に月はわき侍るらんと思ひいれぬ心を

はち侍るなり

【校異】

くもる―曇（明） 見ゆへきこゝろ哉―見ゆへきこゝろかな（文）、みゆへき心哉（明） あはれふ―憐む（明） なさけ

―情（文）、心（明） くもる―曇る（明） わき侍るらん―わき侍らん（文） いれぬ―入ぬ（明） はち侍るなり―耻

侍り（文）、耻侍る也（明）

【本文】

63、くもる夜は月に見ゆべき心かな

月をあはれぶ人のなさけの浅深をば、くもる夜ぞ空に月は分き侍るらんと、思ひ

入れぬ心をはぢ侍るなり。

【語釈】

○くもる夜は：曇っていて月が見えない夜は。「月かげをまつ山のはくもる夜は人にいふべきいつはりもなし」（洞院撰政治家百首・恋・大納言四条坊門・1005）。「しろきやくものひとへたつらむ／くもるよはこころそつくるつきのかけ」（称名寺連歌・24／25）。○月に見ゆ：月によって見られる。「ふすかとはかり夜こそふけぬれ／まつ空を月にみゆとも名やたたむ」（下草（金子本）・恋・625／626）。○月をあはれぶ：月を趣深く見つめる。「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方も知らぬも、猶あはれに、なさけ深し」（徒然草第百三十七段）。○分き：判別する。○思ひ入れ：深く心にとどめること。

【他出文献】竹林抄<sup>1733</sup>、心玉集（野）<sup>313</sup>、心玉集拾遺（静）<sup>1748</sup>、芝草句内発句（吾妻下向発句草）<sup>441</sup>、大発句帳<sup>5016</sup>、於關東発句付句<sup>211</sup>

【補説】『於關東発句付句』の配列、前書きから応仁元年八月十五日の詠。

【現代語訳】

曇っていて月が見えない夜は、かえって月に見られてしまう、月を思う人の心であることだ。

月を趣深く思う人の、その思いの浅さ深さこそは、曇る夜にこそ、空で月は見分けているでしょうと思ひ至らない気持ち、恥じているのです。

【翻刻】

山のははつしほはこへ秋の海

海のはつしほには山の色のをくれてをそき

ことを申侍り

## 【校異】

山のは―山の端（明） はつしほ―初しほ（文）、初塩（明） 秋の海―秋のうみ（文） 海のはつしほには―海の初しほとは（文）、海の初塩には（明） をそきことを―遅き事を（文、明） 申侍り―申侍也（文）、無念と也、はこふはしほといへるによりて也（明）

## 【本文】

## 64、山の端に初しほはこべ秋の海

海の初しほには山の色のおくれておそきことを申し侍り。

【語釈】○初しほ：「初潮」は秋の大潮。旧暦八月十五日の大潮を言う。また、「初入」で、はじめて染料に染物を浸すこと。そこから、草木の葉が色づきはじめることをもいう。「たつたひめしぐれぬさきのはつしほはなににぞめたるみねのみみぢぞ」（続古今集・秋下・503・正三位基雅）。「浅みどりはつしほそむる春雨に野なる草木ぞ色まさりける」（風雅集・春中・112・土御門院）。「うらなれぬ人のかざしを見るぶさに初しほかかる秋の袖かな」（草根集・初見恋・7103）。「入江の水ぞあきをひたせる／はる／とくもる初塩空かけて／きのふけふこそ峯の色／」（伊庭千句第五百韻・6／7／8・聴雪／宗碩／宗長）。○秋の海：秋の季節の海。「月に満つ夕潮寒し秋の海」（筑紫道記）。↓60【語釈】

【他出文献】心玉集（野） 296、心玉集拾遺（静） 1730、芝草句内発句（吾妻下向発句草） 524

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明元年秋の句である。

## 【現代語訳】

山の稜線にはつしほを運んでくれ、秋の海よ（そうすれば、山も色づいてくるだろう）。

海のはつしほには、山の紅葉の色が遅れて、色づきが遅いことを申しております。

## 【翻刻】

春の鴈かへるはあきの花野哉

春の花にはいにしに秋の花にはかへりきたる

とはかり也

## 【校異】

あきの花野哉―秋のはな野かな（文）、秋の花野哉（明） かへりきたるとはかり也―帰来るとなり（文）、帰来とはかり也（明）

## 【本文】

65、春の鴈かへるは秋の花野かな

春の花には去にしに、秋花には帰り来るとはかりなり。

【語釈】○春の鴈：春に北方に飛んでいく雁。本来は春の雁を「帰る雁」と言うが、ここは春の雁をもととして、秋の雁に「帰る」と使っているのが心敬の工夫。「人ならばとはましものをちりぬべき花を見すてて帰るかりがね」（堀河百首・帰雁・97・藤原顕季）。○花野：秋の草花が咲きみだれる野。花野と雁を同時に詠みこむのは珍しい。「白露も色のちくさに咲きにけり秋の花野のさかりしられて」（通勝集・草花露・1093）。「にほひかは秋の花野の朝くもり」（心玉集（静）・秋・804）。「雲にかりつらなる枝のはな野かな」（大発句帳増補卷・秋・5394・宗牧）。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草）440、於関東発句付句176

【補説】『於関東発句付句』の配列、前書きから応仁元年八月八日の詠。心敬は応仁元年四月二十八日に京を発ち、伊勢をへて武蔵国品川に至る。

また、この自注でも「〜とばかりなり」と記すが、このような言い方で説明を簡略化してしまう裏には、説明を求め

る相手の立場なり知識の無さなりへの気配りがあるのかもしれない。

【現代語訳】

春の雁は、帰ってくる時には秋の花野の時期であることよ。

春の花には、雁は去っていくのに、秋の花には、帰ってくるというだけのことである。

【翻刻】

菊にけさ雲ゐのかりのこゑもかな

鴈なきて菊の花さく秋といひてえんなる

比に申侍れはおなしくはあさほらけの菊の

花に鴈の一こゑをそへて見侍らはいへり

【校異】

菊にけさ―菊に今朝（文、明） 雲井のかりのこゑ―雲井の鴈のこゑ（文）、雲ゐの鴈の声（明） 鴈なきて―かり鳴きて（文）、鴈鳴て（明） さく秋といひて―さく秋と云て（明） おなしくはあさほらけの菊の花に―朝朗の花におなしくは（明） 一こゑ―一声（文、明） そへてみ侍らはいへり―そへて見侍はやといへり（文）、添て見侍らんとにはと也（明）

【本文】

66、菊に今朝雲井のかりの声もがな

鴈なきて菊の花咲く秋といひて艶なる頃に申し侍れば、おなじくはあさほらけの菊

の花に、鴈の一声を添へて見侍らばといへり。

【語釈】○菊…題としては晩秋の題。旧曆の九月九日を重陽の節句として、菊の着せ綿をし、長寿を願う。「秋の末の心、菊」（連珠合璧集）。「今朝みれば花ぶさおもみさく菊のませゆふばかりおける露かな」（心敬集・籬菊・50）。○今朝…重陽の節句である旧曆九月九日の、この今日の朝。『新撰菟玖波集』を見ると、次の句に「九月十日」とあり、こうした配列順が傍証となる。○雲井の雁…天空に飛ぶ雁。「明がたの雲井のかりのこゑはしてとやまの霧に残る月かげ」（新撰後撰集・秋上・331・衣笠内大臣）。「雁トアラバ、雲井」（連珠合璧集）。○鴈なきて菊の花さく秋…伊勢物語六十八段の和歌「雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海辺にすみよしの浜」による。この歌は、秋よりも春の海辺をよしとしているが、心敬は、「艶なる頃」と秋のすばらしさの方をとりあげる。正徹、正広、実隆にも、この伊勢物語の歌から秋の景を詠む歌がある。「こゑたつる風もすさまじ雁なきて菊の花さく秋の浜松」（草根集・住吉法楽詠百首・初雁・849・文安六年三月廿三〜廿七日詠）。「春にやは心うつさん雁鳴きて菊の花さくあきのはま風」（松下集・浜菊・98）。なお『伊勢物語』（正徹自署・蜷川智蘊筆）の六十八段には、和歌に関して特に注意すべき書き込みはない。○あさぼらけ…夜がしらむ頃。夜がほのぼのと明ける頃。○雁の一声…雁が一鳴きする声。『竹林抄』所収の本句を注した、『竹林抄之注』は、「専ら秋の面白き時節なれば、菊盛りの折節、同じくは初雁をも聞かばやとなり」と、秋になって初めて飛来した雁の声ととる。初雁の声ならば、風情はいや増しに増すであろう。心敬集には、春と冬の部立でこの語を詠み込んだ歌が見られる。「さ夜ふかく月はかすみて久かたの雲ぬに遠き雁の一声」（心敬集・深夜帰雁・117）。

【他出文献】『竹林抄』1754（「菊を」）、新撰菟玖波集<sup>3775</sup>、心玉集（静）844、心玉集（野）274、芝草句内発句<sup>326</sup>、大発句帳<sup>5374</sup>

【補説】『竹林抄之注』は「鴈鳴て草の花さく秋はあれど」など、よみて、専殊の面白時節なれば、菊さかりの折節、同は初鴈もきかばやと也」、「竹聞」は「鴈ナキテ菊ノ花サクトテ、秋ノおもしろキニイヘリ、トテモノ事ニ鴈ヲ聞テ満足したキト也」と注する。65、66句と春秋の対比を念頭に置いたところから来る表現である。ただ、55、65句で既に見たように、心敬は春と秋を詠みこんでも春秋の優劣をつけるのではない。過ぎ去った春を遠く思い返すことで、秋の光景をより豊かにしているのであり、ここでも、春を低く評価する意識は見せず、秋のすばらしさに目を向けている。

なお、心敬は注してはいないが、「菊」から「聞く」も連想され、「雁の声」につながる。

【現代語訳】

菊の節句である今日九月九日の朝、菊の花に、遠い空の雲のあたりから聞こえてくる、雁の声を添えて聞いてみたいものだ。

「雁なきて菊の花さく秋」といって優美な頃に申しますので、同じことならば、明け方の菊の花に、雁の一声を添えて見ましたら（さらにすばらしいでしょう）といったのである。

【翻刻】

月さらにあひなたのめの二夜かな

二夜にうつし侍るこゝろのたかひに侍れは

こそかゝる二夜にめぐりあひ侍れと也

【校異】

二夜かな―二葉哉（明） うつし侍るこゝろ―うつし侍る心（文）、うつし心（明） かかる二夜に―かへる夜に又（明）と也―はと也（文）

【本文】

67、月さらにあいなだのめの二夜かな

二夜にうつし侍る心の、たがひに侍ればこそ、かかる二夜にめぐりあひ侍れとなり。

【語釈】

○さらに…まったく。○あいなだのめ…あてにならない頼み。そらだのみ。頼みにならないことを頼らせることをいう。「更行けばあいなだのめの空にさへうかりしものを松風のこゑ」（逍遊集・契待恋・2063）。「すてえぬ心恋にこそあれ／よ

の中はあひなだのめをほだしにて」(壁草(三手文庫本)・恋上・1489/1490)。ここは、月が見られないことを、恋人が頼みにさせておきながらやってこない状況を表現する「あいなだのめ」で表した。眺めてもあきたらない二夜の美しい月を恋人に擬して、その月と必ず会えるとは限らない様を言うことで、万人が心に持つ、二夜の月への切なる思慕を表現したことになる。月がなんらかの事情で眺められない場合であっても、月の美を心に持つことを示し、むしろその美を強く打ち出す、心敬流の表現。○二夜…二夜の月。九月十三夜の月をさす。九月十三夜の月は、八月十五夜の月に次いで美しい月として、広く愛でられた。「月の名の秋の二夜をいつよりかことにさやけき景と云ひけん」(他阿上人集・秋・114)。本書の中では、56、57に八月十五夜の月が出ており、配列順からもこの句は九月十三夜の月を詠んだもの。「天つ風雲ふきはらへなほ年にふたよの月は今宵ばかりぞ」(月詣和歌集・九月十三夜に月くもりて侍りければ・746・高松宮)。「月は猶照り添ふ星の二夜かな」(竹林抄・発句・1746・賢盛)。「高き名を争ふ月の二夜かな」(新撰菟玖波集・同じ十三夜に・3777・御製)。○二夜にうつし侍る心…その美しさゆえに、八月十五夜の月に向けた期待を、十五夜が過ぎた後に、あらためて九月十三夜の月にうつして期待を持つ気持ち。

【他出文献】芝草内連歌合(天) 2603、芝草内連歌合(松) 67、芝草句内発句(吾妻下向発句草) 528、  
 【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明元年秋の句。

この句より四句分は、岩下紀之氏所蔵句集切が存在する(岩下紀之「連歌切五点」(愛知淑徳大学論集) 37・2012・3)。  
 岩下氏の論には、句集切の紹介、写真掲載と翻刻がなされている。以下に句集切の該当する部分の翻刻を再掲する。  
 一月さらにあひなだのめ二夜かな

二夜にうつし侍る心のたかひに

侍れはこそかゝる夜に又めぐりあひ侍れと也

※二行目「侍る」に見せケチ(写真のみでは切の性質上読解し難い)



## 【現代語訳】

八月十五夜の月は、思いがかなわず見えなかった。その分、月がどんなに美しいであろうとさらに期待して待っていた九月十三夜の今夜も、まったくその美しさを目にすることのできない夜となったことだよ（心にその美しさを思い慕うばかりなのだ）。

八月十五夜から、九月十三夜の月に心を移したのに、思いと違ってしまって、このような夜にまためぐりあってしまいました、ということである。

## 【翻刻】

よる浪かすわまにたてる菊の花

古今集にすはまに菊うへたるかたを作

たるにかの御詠をあそはし侍り

ふきあけにたてるしら菊は

## 【校異】

よる波か—よる浪か（明） すわまにたてる—すはまにたてる（文）、洲浜に立る（明） 古今集に—古今集にも（明）  
うへたる—植たる（明） かの御詠を—彼句（文）、菅家の御詠を（明）、あそはし侍り—詠合侍り（文）、あそはし侍る  
といへは（明） ふきあけにたてるしら菊は—吹上にたてるしら菊は（文）、浦風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪  
のよするか（明）

## 【本文】

68、よる波か州浜に立てる菊の花

古今集に、州浜に菊植ゑたるかたを作りたるにかの御詠をあそばし侍り。吹上に立てる白菊は。

## 【語釈】

○州浜：曲線を描いて洲が出入りしている海浜のこと。また海に突き出た洲をかたどり、鶴亀などの飾りをつけた台をもいう。○古今集に「あそばし侍り」：古今集秋下、272番、菅原道真詠「おなじ御時せられけるきくあはせに、すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりけるうた、ふきあげのはまのかたにきくうゑたりけるによめる 秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」をさす。「おなじ御時せられける菊合」とは、寛平御時菊合のこと。寛平御時菊合は、寛平年間（889～898）初頃に行われた趣向をこらした菊と歌を競う催し。この菊合の州浜は、名所をかたどり、菊を植えてあり、道真の歌に詠まれたのは、吹上の浜を模して菊を植えた州浜であった。『芝草句内岩橋下』に、「川辺菊花」題で、「大井川汀の菊の一もに思ひあはするいにしへの秋」の歌があり、「寛平御時の菊合の花もつとも此大井川の菊などいでければ、汀の花を見て、むかしの御あそびを思合侍ると也」とある。○吹上：吹上の浜。紀伊国、現在の和歌山県南あわじ市、紀ノ川河口左岸の湊から雑賀にかけての海。

【他出文献】心玉集（静） 858、心玉集（野） 288、芝草句内発句 334

【補説】前句同様、岩下氏の論から、句集切の翻刻部分を再掲する。

よる浪かすはまにたてる菊の花

古今の集にすはまに菊うへたる

かたを作たるにかの御詠をあそ

はし侍り吹上にたてるしら菊は

## 【現代語訳】

浜に寄る白波なのであろうか：波とみまがうばかりだよ、州浜に立っている白菊の花は。

古今集に、州浜に菊を植えてある様子を作っている、その様子について、(道真公が)あの御歌を御詠みになっています。吹上の浜に立っている白菊です。

## 【翻刻】

秋は今すゑつむ色のした葉かな

くれなるといへる心をすゑつむにてふくませ

侍り秋の末なればことはのえんよろしく哉

## 【校異】

秋は今―秋はいま(文) すゑつむ色の―末摘色の(明) した葉かな―下葉かな(文)、下葉哉(明) くれなるといへる(文、明) すゑつむにて―末摘にて(文)、末つむにて(明) ふくませ侍り―ふくませ侍る(明) 秋の末なれば―秋の末など、(明) ことはのえんよろしく哉―詞のえんよろしくや(文)、いひなかつ詞よろしくや(明)

## 【本文】

69、秋は今末摘色の下葉かな

紅といへる心を末摘にて含ませ侍り。秋の末なればことばの縁よろしくや。

## 【語釈】

○末摘色：末摘花(紅花)の色。紅色。「末摘色」は他に例が見えない。造語か。『源概抄』に「くれなゐは花のすゑあかきものなり、すゑをつみてとるなり、此心にすゑつむといふ」とあり、紅を末摘と呼んでいる。また『源氏小鏡』に

は、巻名を「すゑつむ」とするものもある。「うらみてだにも君したふ色／ちぎりはや末つむ花のから衣」（北畠家連歌合・一四二番左・参議具茂）。「紅葉ちるかげは末摘花野かな」（専順等日発句・十月5・専順）。○秋は今…世はおしなべて秋の景色だが、今この時には。「今」は「末」に続く。「秋は今袖より露の落添て／時雨になりぬ長月のそら」（熊野千句第二百韻・31／32・頼宣／専順）。

【他出文献】心玉集（静）849、心玉集（野）275、芝草句内発句323、

【補説】同様に、岩下氏の論から、句集切の該当する部分を再掲する。

秋はいますゑつむ色のした葉かな

紅といへる心をすゑつむにてふく

ませ侍り秋のすゑなれはこの葉

のえんよろしくや

### 【現代語訳】

秋は今いよいよ終わりに近づき、木々は下の方の葉から紅色に紅葉していることよ。

紅という意味を「末摘」で含ませています。秋の末なので、言葉の縁がうまくあるかと。

~~~~~

【翻刻】

水をさへ掬する花のなかれかな

きくするといへるを菊にとりなし侍り 花

ゆへ水をうけたるともむすへるともいへり

【校異】

なかれかな一流哉（明） いへるをーいへる心を（文） とりなし侍りー取なし侍り（文）、取成侍り（明）、うけたると

も―うけたりとも(文) むすへるともいへり―むすへる共いへり(文)、結へるともいへり(明)

【本文】

70、水をさへ掬^{ぎく}する花のながれかな

さくするといへるを、菊にとりなし侍り。花ゆへ水を受けたるともむすべるともいへり。

【語釈】○掬す…水などを両手でくむこと。すくいあげること。『日葡辞書』には、「Mizzuno gicusuru (水を掬する)」と例を出し、「手を洗う、文書語」とする。「菊」との掛詞。発句の中に、漢語を入れる心敬の感覚は注意される。○花…自注から菊の花のこと。「掬水月在手 弄花香满衣」(全唐詩・春山夜月・于良史)。○むすぶ…水を手のひらですくいあげること。「掬ムスフ、ニギル、ツツム」(類聚名義抄)。「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」(古今集・春上・2・紀貫之)。

【考察】于良史の「春山夜月」の詩句を意識して詠んだ発句か。詩句は春の季節であるが、「掬」を「菊」ととりなして秋の発句と見ている。詩句そのものは、虚堂和尚語録に載る禅語としてよく知られ、心敬の教養の一端が知られる。

【他出文献】心玉集(静) 846、心玉集(野) 276、芝草句内発句 328、芝草内連歌合(天) 2615、芝草内連歌合(松) 80

【補説】同様に、岩下氏の論から、句集切の該当する部分を再掲する。句集切は、この句の発句のみで終わっている。水をさへ掬する花のながれかな

【現代語訳】

水までもすくいあげているような、(菊の)花が濡れ水の流れのように見える花園であることよ。

「掬する」というのを、「菊」ととりなしています。花であるので、水を受けているともすくっているともいってゐる。

【引用文献概観一覽】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった（『新編国歌大観』によった場合には、(類題本)と注している）。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本（旧国歌大観番号）により、引用は『新編日本古典文学全集』によっている。連歌関係その他、引用は左記に記すが、『連歌大観』第一卷（古典ライブラリー：平成二八）を適宜参照している。

- 菟玖波集：『菟玖波集の研究』（風間書房・昭和四〇）所収広島大学本
 芝草句内発句：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
 吾妻邊云捨：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
 心玉集・心玉集拾遺（静嘉堂文庫本）：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
 於関東発句付句（吉田文庫本）：『心敬十体和歌評釈と研究』（和泉書院・平成二七）
 宇良葉：日文研データベース所収桜井氏蔵本（及び深井一郎氏による翻刻「宗祇連歌発句集 宇良葉」（『金沢大学教
 育学部紀要8』（196）参照）
 行助句集：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
 連歌愚句：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
 愚秘抄：『日本歌学大系』第四卷（風間書房・昭和三二）
 連珠合璧集：中世の文学『連歌論集一』（三弥井書店・昭和四七）
 連歌百句付：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
 宝徳四年千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）
 自然齋発句：岩波文庫『宗祇発句集』（岩波書店・昭和二八）

- 宗硯発句并付句抜書：貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）
- 源氏一部抜書：『源氏物語資料影印叢書1 源氏一部抜書』（早稲田大学出版部・平成元）
- 竹林抄之注：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）
- 難波田千句：日文研データベース所収本
- 下草：貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』（角川書店・昭和五二）
- 徒然草：新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（岩波書店・平成元）
- 称名寺連歌：日文研データベース所収本
- 伊庭千句：古典文庫『千句連歌集七』（昭和六〇）
- 心敬句集苔筵：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）
- 年中日発句（金子本）：『連歌貴重文献集成第五集』（勉誠社・昭和五四）
- 熊野千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）
- 類聚名義抄：『天理図書館善本叢書』（天理大学出版部・昭和五一）
- 『伊勢物語（正徹自署・蜷川智蘊筆）』：『伊勢物語古注釈書コレクション第一巻』（和泉書院・平成一一）
- 北畠家連歌合：『連歌貴重文献集成第二集』（勉誠社・昭和五四）
- 新撰菟玖波集：天理図書館善本叢書『新撰菟玖波集実隆本』（天理大学出版部・昭和五〇）
- 大発句帳：古典俳文学大系CD-ROM所収鈴木本
- 日葡辞書：『邦訳日葡辞書』（岩波書店・昭和五四）
- 全唐詩：該当句は、岩波文庫『禅林句集』（平成二二）より
- 竹聞：貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』（角川書店・昭和四四）
- 源概抄：『源氏物語古注釈叢刊 第十巻』（武蔵野書院・平成二二）

袖かゞみ…九大細川文庫本『袖かゝみ』(129-154-1-60)。引用は、国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースによる。

壁草(三手文庫本)…古典文庫『壁草注・壁草(三手文庫本)』(昭和五七)
所々返答…中世の文学『連歌論集(三)』(三弥井書店・昭和六〇)

【参考文献】

- 岩下紀之「連歌切五点」(愛知淑徳大学論集) 37・2012・3)
 島津忠夫監修『心敬十体和歌評釈と研究』(和泉書院・平成二七)
 中野幸一「猪苗代兼載『源氏一部抜書』の資料的価値」(『源氏物語古注釈の世界』(汲古書院・平成六))
 稲賀敬二『源氏物語の研究成立と伝流補訂版』(笠間書院・昭和五八)
 岩坪健『『源氏小鏡』諸本集成』(和泉書院・二〇〇五)

この訳注は、科研費基盤研究C(24520222)「中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」の成果である。